

大伴家持「山の歌」と「川の歌」

——山川異域として——

森

斌

はじめに

「山の歌」と「川の歌」とは、「山、峰、岳、丘」などの歌語と「川、瀬、天の川」などの歌語が詠み込まれた歌を指す。丘を含ませたのは、雷丘を雷山とも呼ぶ場合もあるからである。一方、甘南備山は、丘と呼ばれずに山に限定される場合もあつて、小高いところであると言ふ丘も山と同じでありながら、固有名詞によつては微妙な使い分けがある。家持にも「丘」の歌は、一例である。

また、天の川を川としたことも、奈良時代の一般的な発想でもあり、家持は天空を海として見るからである。それは地上の川も最終的に海に注ぐからであろうか、或いは太陽や月を船に譬える人間の感性からであろうか、普遍的なものである。古事記の創世でも天と地が誕生したというが、西郷信綱氏が言う天地初発の地とは、地球であり、陸と海を指す。^(注)とすれば天にも海も陸もあり、安の河原、高天の原などは陸地であろう。

ちなみに歌の解釈等で数は変わるが、一応以上の配慮を試みた上で、山の歌と川の歌が、それぞれ特質とする内容があることを明らかにしたい。

まず山の歌、川（「やまがは」「谷川」）を含むの歌、そして山と川の意味がある「山川（やまかは）」の語を含め

大伴家持山と川の歌

習作時代

山	川	山と川
1554.1568.1447. 1494.739.466.471. 474.1629.3911.1602. 1603.765.1464.1632. 769.779.476.477.478.	715.1035.3854. 1635.	1037.475.

越中時代

山	川	山と川
3962.3969.3978.3981. 3983.3987.4001.4013. 4015.4026.4076.4089. 4097.4111.4122.4136. 4145.4151.4152.4154. 4164.4166.4169.4177. 4178.4180.4185.4192. 4195.4225.4239.	3953.4002.4021. 4022.4023.4028. 4100.4106.4125. 4126.4127.4146. 4147.4150.4157. 4163.4189.4190. 4191.	3957.3964. 3985.3991. 4000.4006. 4011.4024. 4094.4098. 4116.4156. 4160.4214.

少納言時代

山	川	山と川
4266.4281.4305.4395. 4397.4398.4481.	4288.4309.4468.	4360.4465.

て一首で山と川をうたう歌ということで三つに分類出来る。また、山川の歌は、習作時代（百五十八首中二十六首）、越中時代（二百二十三首中六十四首）、少納言時代（八十二首中十二首）である。そこで山川の歌番号だけで示せば、次の表になり、歌は百二首が対象となる。

山と川を取り上げるのは、東征伝に鑑真の言辭に長屋王が千の袈裟を造り、その縁に「山川異域も、風月は天を同じくする」と刺繡したということを配慮している。即ち、この山と川が風土の象徴であるからで、同様に天平二十一年三月の越前掾大伴池主の贈歌（四〇七三）に「山こそば君があたりを隔てたりけれ」とあり、越中国守家持の答歌（四〇七六）に「あしひきの山はなくもが」とある。共通は月が同じ里と国を照らすことである。

池主も家持もここでは山が越中と越前を隔てるというのである。これは、川がここで登場していないが、越前と越中という国の違いということで地域の風土を踏まえた内容にある。

『時代別国語大辞典上代編』で「やま」の項目を見ると、山・山岳、採木地、そして墳墓とある。又、『万葉集総索引』によれば、「山」の表記が圧倒的であるが、万葉仮名の例も若干ある。さらに固有名詞としての小倉山などの例も多いが、出田和久氏の研究によれば、筑波山が二十二首、春日山が十八首、三笠山が十六首、平城山が十四首、竜田山が十三首、富士山と香具山が十一首、そして吉野山が三首ということである。^{（注1）}

川は、『時代別国語大辞典上代編』に語釈として川とあるのみである。しかし、熟語は圧倒的であるから、わざわざ細かく枝分けして説明する必要もないのであろう。万葉で一番多く詠まれた固有名詞の川は、明日香（の）川が二十六首である。吉野（の）川が十六首、その他、泊瀬（の）川が十一首と目立つ。複数でうたわれた固有名詞をもなう山も川も例外があるにせよ、明日香と平城京を中心とした七、八世紀の人々に親しまれた名前がほとんどである。

万葉全般で山と川という意味で「やまかは（山川）」もある。川を濁音で読む「やまがは」は、山を流れる谷川の意であり、解釈によって若干相違があるであろうが、十二首の例があるだけで限定された言葉である。家持も一首（四四六八）谷川の意味で「山川」を用いているが、山と川を「山川」として同時にうたうことも万葉集の特徴である。

それは、川の源流としての山の存在にも由来していると考えている。即ち、矢釣山と八釣川、或いは多武（多武峰）と細川などであるが、そのことは触れたことがある。^(注3)

風土と呼ぶ内容を山と川とで代表させているが、家持全歌数四百七十三首中で百二首が対象であれば、家持論として象徴なりの意味がある。

なお、作品の年代については、中西進氏著『大伴家持万葉歌人の歌と生涯（1から6）』（角川書店平成六年八月から平成七年三月刊行）を参照して作品の編年を構成している。

一 家持習作時代（十五歳から二十九歳）

万葉一般でいう山歌の第一としては、引用した卷十三歌のように人を守る山がある。甘南備山、香具山、三輪山などが典型的なその範疇に入る山であり、日本という国を守るのが富士ということになる。また、筑波山も当然この山の範疇に入る。家持では、越中時代の二上山、立山が相応する。また、富士山、筑波山、香具山、三輪山、甘南備山は、信仰の対象になる山である。

三諸は 人の守る山 本辺には あしび花咲き 末辺には 椿花咲く うらぐはし 山そ 泣く子守る山
(十三・三三二二)

次に第二の例としては、相聞歌などで恋の障害としての山の存在があつて、人麻呂石見相聞歌（二・二三一）や

三三四二番は、靡けと山に叫んでいる。しかし、これは一般的に通行の障害としての山の存在である。このことは、旅人が遙か遠い異国に来たことを、或いは生国でない他国を確認する山の存在でもある。これは、隔ての山としての存在ということになる。

ももきね 三野の国の 高北の くくりの宮に 日向かひに 行靡關矣 ありと聞きて 我が行く道の 奥
十山 三野の山 なびけと 人は踏めども かく寄れと 人は突けども 心なき山の 奥十山 三野の山
(十三・三三四二)

また第三の例としては、墳墓としての山ということがある。大伯皇女が天津の埋葬された二上山をうたっている。これは家持も安積皇子と亡妻の葬られた山をうたうことで知られる。

うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟と我が見む (二・一六五)

卷十の季節分類に注目したい。山の歌は、秋の部に収められている。ここでは、黄葉が取り合わせで目立つ。また、植物だけではなくて、鳥類を中心に動物なども組み合わせられている。

山を詠む

春は萌え夏は緑に紅の斑に見ゆる秋の山かも (二一七七)

山に寄する

秋されば雁飛び越ゆる龍田山立ちても居ても君をしそ思ふ（二二九四）

とすれば、第四の例としては、山に居る、或いは生えている動植物との組み合わせがある。

第五の例としては、巻十でも秋という季節に拘る山の存在があった。主題として季節に拘ったのであれば、春山（十首）、秋（の）山（十九首）の存在がある。夏山は家持にも一首（二四九四）がある。冬山はまだ誕生していないが、春秋と夏の山は存在していた。これは、百人一首で有名な持統天皇歌にある「春過ぎて夏きたるらし」（二二八）などの表現にも関わる山の歌の存在である。

一方、川の歌として第一は、井戸と同様に日常生活の場であり、水のよりどころとして農業、或いは炊事等で欠かさない。とりわけ大和では、固有名詞の泊瀬山と泊瀬川、三輪山と三輪川、巻向山と巻向川のように山と川とが一对になつている場合がある。或いは吉野川であれば、吉野山（三首）というよりも、象山と御船山という組み合わせもある。固有名詞の山と川を除く普通名詞で用いられた山の例は、約二百首、川の例は約七十首であり、万葉集の一般的な特徴は、山の例が圧倒的に多い。しかし、固有名詞の用例は、泊瀬川、飛鳥川、吉野川、佐保川であり、大和以外では宇治川が十三首に用いられていて案外目立つ。とりわけ明日香川の存在は明日香万葉では日常的である。

固有名詞の山として、甘南備山が甘南備川を圧倒しているようなものもあるが、一般的に川が山よりも日常生活に近い存在であった、と考えてよい。或いは、聖地吉野の歌は八十首を越えているが、吉野川（十五首）が圧倒的であり、よし吉野山（三首）の例が乏しい。

第二の典型的な川乃至山川としては、「きよし」「さやか」という歌語と結びつく例が多いことを指摘したい。それ

は、川が清浄な場所とかかわるということである。

泊瀬川木綿花に落ち激つ瀬をさやけみと見に来し我を(七・一一〇七)

夕去らずかはづ鳴くなる三輪川の清き瀬の音を聞かくし良しも(十・二二二二)

鳥や蛙が鳴く川、或いは恋歌に登場する清い瀬、早い瀬、あるいは藻の生えている、乃至植物が繁茂しているなどとうたうのが川の一般的な歌である。巻七には、山(丘を含め)の歌が七首(二〇九二から二〇九九)、河の歌が十六首(一一〇〇から一一一五)収められている。川の歌は、四首に「さやか」「さやけし」が用いられていて、「きよし」一首に使用されている。又、川は、巻十には、春雑歌と秋雑歌に一首ずつ載せられている。秋雑歌は、二二二二番であり、既に引用している。

川を詠む

今行きて聞くものにもが明日香川春雨降りて激つ瀬の音を(一八七八)

雨が降れば増水する。心配は尽きない。川の音に配慮が必要であった。しかし、川には、河原もあり、瀬もあり、滝もある。それらに植物が添えられたり、鳥が描かれたりするが、川音を含めて「さやけし」というのが川の歌の本質である。即ち、さらに川の瀬音に惹かれるのは、川の音を清くてよしとする前提があつて誕生するのであろう。こゝは、行つて聞きたいと願うのは、遠くにいて歌われたからであらうから、作者は明日香にいなかったことになる。

二二二番の三輪山の裾を流れる川を初瀬川ともいう。其所に鳴く河鹿をうたうが、この一首だけであり、同じ蛙と言うことであれば、吉野川のかじかが一般的である。この歌でも主題は、当然清き瀬にあるが、山川の清浄な土地であることを述べることに関わり、土地誉めである。

藤田加代氏によれば、「清し」は、月夜が十七例、浜が十二例、河原が七例、瀬が六例、河内が五例としてとりあげている。月と水や川と関わる言葉が「きよし」である。(注)

第三の例としては、川の幸に触れる歌がある。とりわけ鮎に拘った川の存在がある。「鵜川立つ」などという表現とも関係するが、夏という言葉と結びつきが皆無である。川は鮎の結びつきがあつて、十三首に見られる。人麻呂の吉野賛歌(一・三八)には、川の幸を「行き沿ふ 川の神も 大御食に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鵜川を立ち 下つ瀬に小網さし渡す」とある。

第四の例としては、障害としての川の存在がある。但馬皇女が夫を高市皇子から穗積皇子に代える寓意をうたつた、

人言を繁み言痛み己が世に
いまだ渡らぬ朝川渡る(二・一一六)

等もこの例であり、交通の傷害として川の存在と重なる。山で述べた言葉を使用すれば、相聞歌では人を、旅では国を隔てたりする川の存在である。

第五の例は、特殊な川である。厚見王の歌一首は、山吹の咲いている場所とは生命復活の水のある場所であるとすれば、次の歌などは特殊な歌である。

かはづ鳴く神奈備川に影見えて今か咲くらむ山吹の花(八・一四三五)

山を五例、川を五例に分類した。これを習作時代の家持歌二十六首に当てはめたときどうなるのであろうか。家持は平城京での山と川では、習作時代で目立つのは天平十一年の亡妾挽歌で用いられている「山道」(四六六)「山隠し」(四七一)「佐保山」(四七三、四七四)である。佐保山は、亡妾が葬られた処でもあった。また、天平十六年の安積皇子挽歌で墓所である「和束山」(四七五、四七六)、或いは皇子がかつて遊獵した「活道山」(四七八、四七九)である。平城京の東に位置する三笠山、さらに邸宅近くを流れる佐保川などは、普段の生活の環境として、黄葉、千鳥、ホトトギスといった景物と結びつけている。その景物としては、墓地、或いは死者の山に行くという他界感で登場するのが、「佐保山」「和束山」「活道山」である。

言語芸術においては初期の作品に、その後の諸々の言語活動で試みたことが内在しているという。万葉の山歌、或いは川歌の概略で特徴とした川の清浄をうたう、山とそこにいる動植物の組み合わせをよむ、山と川が恋、或いは交通の障害として嘆く等等、習作時代の家持にも取り入れられた。目立つのは、家持の山川歌二十六首(長歌四首を含む)中で七首の挽歌に詠われた山の存在である。その一方で明日香川のような存在の川が佐保川である。また、「山川」という伝統的な歌語は、川の幸をも表現して久邇京を讃える表現としてしている。これは、柿本人麻呂の吉野賛歌の伝統の庶幾でもある。

習作時代の纏めとして言えば、家持独自であるという山川を歌に詠うということはない。しかし、万葉の山川の一般的な特徴は、習作時代にほとんどが試みられていると言つていい。ちなみに山全体の桜花の繁栄と人間の死を比喻として表現した安積皇子挽歌と一重山を隔てとして寂寥をうたう妻大嬢への相聞歌とが代表作である。

あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬるとき我が大君かも (三・四七七)

一重山隔れるものを月夜良み門に出で立ち妹か待つらむ (四・七六五)

四七七番は、沢瀉久孝氏につとに評価されている。^(注5)期待の皇子の突然の死を山に咲く桜の繁栄とその落下に委ねられていて、桜の歴史からも評価されていい山の歌である。或いは、妻大嬢と一緒にいられない寂しさをうたうが、三重、乃至七重八重ともしないで、最小単位である一を用いていて、かえって慎ましくも障害としての山の存在を遺憾なく發揮した心情表白が感動的な一首が七六五番である。また、伊藤博氏は、妹を訪ねる条件としてよい月がこの場合障害の一重山と対照的になつていて、かえって家持の寂寥が深まつているとする。^(注6)

二 越中風土への関心 (二十九歳から三十四歳)

家持の越中時代とは、二十九歳から三十四歳までの五年間である。その間に山の歌三十一首、川の歌二十首、山川の歌十三首を創作している。越中の全歌に占める割合は28パーセントであり、習作時代や少納言時代を遙かに超えた高い比率である。

越中守として赴任の最大の目的に東大寺建立という経済的な要望を橘諸兄から求められていたらしい。しかし、直接的な内容を示す越中時代のものとして、天平感宝元年五月五日に東大寺の占墾地使の僧平榮と宴をした巻十八・四〇八五番題詞がある程度である。

しかし、越中国守として都のお土産とする三十歳に作られた二上山の賦(七七・三九八五)は興により作歌したと

あり、個人的な場で作られていても、都の人を意識した内容もある。それは、和歌を作ることが宴席で行われて、歌の主題がそれぞれの立場から志を述べることであり、その一方で宴席といながら風流と言うべき主題には雪月花が素材に選ばれるからでもある。ここでは、家持の研究では習作時代、越中時代、さらに少納言時代の三区区分して考察するが、山と川という歌語に注目するとき、特に越中の風土が興味深く思われる。

即ち、家持は宴席で歌を作ること多いが、その一方で極めて個人的な風流の感興で創作していて、その越中には北アルプスとその山を源とする都と対照的な「山河異域」がある。

山や川の歌としては、家持の習作時代や少納言時代に見られない特質がある。それは、風流な都と対照的な越中という三千メートル級の山々が存在する北アルプス立山とそこに源をなし、数十キロで富山湾に注ぐ川の存在という越中ならではの風土があった。さらに都と異なる北国であるために雪の多い、春の訪れが遅い気候も加わって、貴族には珍しいことであるが、花鳥風月を含めて赴任地に興味を持ったためでもある。地域的な風土である越中の山では、二上山九首、立山六首が目立つ。

天平十八年七月に赴任したであろう家持は、そのとき越中の掾であった池主の存在が作家活動でひときわ刺激を与える存在になった。しかし、池主は越前に赴任してしまう。後任は久米広縄であり、天平二十年三月から知られる。しかし、天平二十一年三月十五日越前掾大伴池主から歌が三首贈られてきた。一方翌十六日家持は応え贈る四首を創作する。歌は一首のみ引用する。

今月十四日を以て、深見村に到来し、彼の北方を望拝す。常に芳徳を思ふこと、いづれの日にか能く休まむ。兼
 ねて隣近なるを以て、忽ちに恋を増す。加以、先の書に云はく、暮春惜しむべし、膝を促くること未だ期せず、

生別の悲しび、それまたいかにか言はむと。紙に臨みて懐断し、状を奉ること不備。

三月十五日、大伴宿祢池主

一 古人の云はく

月見れば同じ国なり山こそば君があたりを隔てたりけれ（十八・四〇七三）

池主の贈歌に対して家持は返歌をしている。散文を省略して歌一首のみ引用する。

古人の云はくに答へて

あしひきの山はなくもが月見れば同じき里を心隔てつ（十八・四〇七六）

森
万葉集には、池主歌に類型的な人麻呂歌集の歌（十一・二四二〇）がある。池主は、人麻呂歌集の歌と比較して「妹」を「君」、「同じ国なり」を「同じ国そ」、「山隔り」を「山こそば」、「隔りたるかも」を「隔てたりけれ」とうたう。

この国は山で境界としてゐること、さらに月は天が同じという発想をさらに川と風を加えて八字熟語でまとめるのは、鑑真の伝記『東征伝』である。日本の年号で天平十四年に当たる年に、日本留学僧栄叡と普照が揚州大明寺で、鑑真和上に面会した。その場面に和上の言葉として、長屋王が千の袈裟を造り、その縁に「山川異域も、風月は天を同じくす」とあると述べてゐる。鑑真のその後の渡日五回の失敗と十二年の歳月を費やしたことから言えば、山川よりも海が異域であり、そして同時に風月が海であったことになる。

鑑真は、日本を遙かなる国であることを、山と川が異なるといいながら、共通する月と風で縁ある国であることを述べたのである。

越中時代では、家持も風土が異なることから、積極的に土地の山川がうたわれた。固有名詞を伴う山は、二上(の)山(峰)(十七・三九五等九首)、立山(十七・四〇〇〇等三首)、須加の山(十七・四〇一五)、能登の島山(十七・四〇二六)、陸奥の山(十八・四〇九四等二首)、砺波山(十九・四一七七)などがある。家持三賦には、立山と二上山が登場しているし、山の帯としての射水川と片貝川がある。越中富山の風土からは、北アルプスと富山湾に注ぐ川が意識されたであろう。平城京や大和の人々にとつて恐らく想像を超えた存在であろう。

立山を代表とする北アルプスは海岸からも見える。射水川(小矢部川)は、八世紀には小矢部川と高岡市の郊外で合流していて、国衝のあった伏木辺りでは大河であったであろう。また現在の神通川、早月川、片貝川に匹敵する激流も平城京付近では適当な類似する川も見出しがたい。せいぜい平城山を越えて泉川(木津川)が大河の趣を見せている。その意味では宮滝と吉野川などは、奈良貴族にとつて山紫水明の桃源郷であった。

越中守赴任後初めての宴席で披露された歌が十三首記録された。天平十八年八月七日の日付をもつ三九四三番から三九五五番である。そのなかでは家持は六首を創作しているが、二首を引用する。

秋の田の穂向見がてりわが背子がふさ手折りける女郎花かも(三九四三)

馬並めていざ打ち行かな洪谿の清き磯回に寄する波見に(三九五四)

この宴席では、大伴池主、秦八千鳥、土師道良の名前も知られが、そもそも歌の素材として家持が創作した六首全

てに「秋の田の穂向き見がてり」(三九四三)「雁」(三九四七、三九五三)「天ざかる鄙に月経ぬ」(三九四八)「家に
して結びてし紐を」(三九五〇)「洪谿の清き磯回到」(三九五四)と表現するのは、越中を強く意識している証であ
る。これが都であれば、稲の収穫が話題にならなかつただろうし、雁が鶴に、鄙での月日はと形容されることもない
し、さらに奈良で過ぐすので紐も結はなくていい。形式的なお開きの挨拶歌であつてもわざわざ「越中洪谿の清き磯
回に行こう」と誘うこともないのである。とりわけ、雁と川の組み合わせ(三九五三)も越中でこことだけである。

海を身近にしていないう大和の人にとつては、難波にいくか、和歌浦にいくか、とにかく海は簡単に見られない。こ
こで注目したいのは池主の土産にオミナエシがあつたことである。オミナエシは、万葉全体でも秋の七草に憶良が
加えているが、その表記は、多面的である。「おみな善し」とい語感もあつてか、「女郎花」「佳人部為」「美人部師」
「娘子部四」「娘部志」「姫部思」なども記されて、いかにも可憐な雅花である。ここでの女郎花はあきらかに京師
と鄙越中との対比が含まれる。鄙を意識させるといふよりも、稲の生育を調査するといふ仕事と対照的な雅な名称を
持つオミナエシの贈り物は、家持をほっとさせたであらう。池主の土産に感激して家持が越中を意識してそれを歌に
表したのである。

ちなみにオミナエシは、越中では一首だけであるが、都に戻つてからも歌二首に花として選ばれている。むしろ、
越中でもっと詠まれていいはずであるが、越中ではこの場以降にはうたわれない花である。

ところが七年後の天平勝宝五年八月十二日に高円の野に登つて池主、中臣清麻呂、そして家持が歌を作っている。
池主は尾花をうたい、さらに「紐解き開けな直ならずとも」(四二九五)とくつろぐ気持ちをうたう。家持ははぎに
添えて四二九七番でオミナエシをうたう。そこに越中で歌友であつた池主の存在があつたことが感じられる。即ち、
ここにオミナエシをうたうのも、鄙での思い出の植物であつたあたりからであらう。清麻呂もはぎをうたうがオミナエシ

はない。四三一六番は、翌天平勝宝六年に家持が「独り秋の野を憶ひて」(四三二〇 左注)とあり、前年での三人による聖武天皇狩獵地であることを、一人思い出しているのである。そのことがオミナエシをうたわせているのであるが、池主と過ごした越中守時代を思い出し、さらに聖武天皇の故地であることがいつそうオミナエシをうたわせたのであろう。

女郎花秋萩しのぎさ雄鹿の露別け鳴かむ高円の野そ(二十・四二九七)

高円の宮の裾回の野づかさに今咲けるらむ女郎花はも(同・四三二六)

家持にとつては、オミナエシは特別な花になったのは、越中国守として初めての宴席で大伴池主がお土産にいつぱい手折つて来たことにはじまる。ほつとしている間もないほどの九月二十五日に弟書持の死が知らされた。

(略) 朝廷に 出で立ち平し 夕庭に 踏み平げず 佐保の内の 里を歩き過ぎ あしひきの 山の木末に
白雲に 立ちたなびくと 我に告げつる「佐保山に火葬す。故に「佐保の内の 里を歩き過ぎ」といふ。」
(十七・三九五七)

弟書持とは、平城山を越えた木津川で別れをしたという。続く越中までの道のりとは、奈良山と泉川の名前だけであり、その後の山城、近江、若狭、越前にある具体的な名称はなく、総括的に山川の隔てる地であったとある。川や山は鄙の地であることを形容する歌の表現であっても、都での山と川に奈良山と泉川を具体的に述べているのに対し

て、ここでは抽象的である。さらに引用した歌にある如く、佐保の里を過ぎて山（佐保山）に埋葬されたとうたう。家持が越中へ赴任したときの道を想像してみれば、越中で初めての出拳でも、能登の船旅を想像してみても案外船に弱かった武人であつたらしいので、琵琶湖や若狭から越前まで船を用いたとも考えられない。山城から近江、さらに敦賀から越前を経て越中に陸路を利用したのであろう。高島、比良、新発の関も、若狭から越前に入る山道の名称も、或いは俱利伽羅峠、さらに現在名で言えば九頭竜川、日野川、犀川も越え渡つたのであろうが、それはすべて「山川の隔りてあれば」とする。

三 越中の山

風土への関心は、山の名前、あるいは川の名前となつて具体的に表白されていく。俄然越中の山に興味を示したのは、家持三十歳になつた翌天平十九年からである。家持の山に関わる歌の越中の代表は、二上山賦と立山賦である。しかし、前年の冬か、或いは天平十九年正月早々であろうか、家持は重い病氣になつてゐた。その回復につれて創作を熱心に試みている。たまたま四月末か五月に家持が税帳使として上京の予定もあつた。そこで越中の風土を歌で紹介する試みもあつてか、独りで詠んだ二上山の賦（三九八五から三九八七）に触発されて、布勢の水海の賦（三九九一、三九九二）、立山の賦（四〇〇〇から四〇〇二）を三月から四月にかけて創作している。

注目するのは、越中の風土を天平十九年には都を意識したとき、家持が二上山、布勢の水海、立山で代表させていることである。

二上山は、大和にも同名の山が存在する。頂上が二つになつていて筑波山も同様の形態である。平城京からは案外

見えにくいのであろうか。とりわけ明日香に住む人には西に位置していて落日の山である。家持も京師ではないこの鄙越中にも二上山があることを、また国庁の背後をなす山であるから、国の護り山として親近感を抱いていたであろう。布勢の水海は、現在はわずかな池であるが、家持が国守であった頃は、豊かな湖沼であった。船遊びをしても、その境界の風光にしても愛でるべき内容があった。立山は、具体的に立山連峰のどの山を指すかといった議論もある。国司館があつた高岡からは剣岳、大日岳などが直接的に見えていて、現在立山の中核と考える雄山などは大日岳の背後にあつて見えにくい山である。

まず巻十七にある二上賦に注目したい。小野寛氏は、「今まで歌つたことのなかつた『山ほめの歌』を伝統に従つて作つてみよう」という意識、そういう心の働き、それを『興』として試作(金吾)したという理解を示している。

二上山の賦一首 「この山は射水郡に有り」

射水川 い行き巡れる 玉くしげ 二上山は 春花の 咲ける盛りに 秋の葉の にはへる時に 出で立ちて
 振り放け見れば 神からや そこば貴き 山からや 見が欲しからむ 皇神の 裾回の山の 洪谿の 崎の荒磯
 に 朝なぎに 寄する白波 夕なぎに 満ち来る潮の いや増しに 絶ゆることなく 古ゆ 今の現に かくし
 こそ 見る人ごとに かけて偲はめ (三九八五)

洪谿の崎の荒磯に寄する波いやしくしくに古思ほゆ (三九八六)
 玉くしげ二上山に鳴く鳥の声の恋しき時は来にけり (三九八七)

右、三月三十日に興に依りて作る。大伴宿祢家持

越中時代の山と川の歌は、風土を踏まえた歌が多い。それは、宴席であれ、周囲にある地名を含めた歌の素材が越中なのであるから当然である。一方ではそれは都と鄙との対比がもたらしたものである。

この二上山の賦は、興で作ったとあり、守の言葉が用いられず大伴宿禰家持とあることも、一人で感興の赴くままにつくったのであろう。これは、他の二賦である布勢の水海（三九九一）と立山賦（四〇〇〇）とは、池主の敬和が試みられているから、贈答が意識されている。その意味では家持三賦中でも最も他者を意識しないで、むしろ自然な自己の感情をうたっているであろう。

まず、「春花の 咲ける盛りに 秋の葉の にほへる時に 出で立ちて 振り放け見れば 神からや そこば貴き 山からや 見が欲しからむ」という十句を費やして二上山は「すめ皇の 裾廻の山の」という。これは、二上山の贊美がそこに君臨する天皇贊美と同質になっている。越中も大和も同様な甘南備山があるのであろうが、たまたま越中では二上山が甘南備山であったことになる。大和にある香具山、雷の丘、三輪山が甘南備山としてうたわれるが、鄙の国でありながら、越中二上山が天皇支配の讃仰から言えば甘南備山になった。越中の二上山は天皇が国見をしたり、額田王に惜別の歌を代作させる神の住む三輪山や香具山と同質であるというのである。しかも、春の花、秋の紅葉は、美しい景色というよりも、天皇が出で立ち国見する山に相応しい。ここにあるのは、越中も大和も天皇が国見する土地であるという家持の意識である。美しい越中二上山の春の花と秋の黄葉をうたうものではない、天皇贊美として国見する場所として位置づけている。

また、山につきものの帯としての川は、初句と第二句で「射水川 い行き巡れる」であるが、さらに海岸まで「浪谿の 崎の荒磯に 朝なぎに 寄する白波 夕なぎに 満ち来る潮の いや増しに 絶ゆることなく」と描写している。海と山、そして帯としての川、それを天皇贊美の二上山の賦で試みたのである。そこにあるのは、二上山という

越中ならではの風土というべきであろう。

この歌の特質として興味深いのは、海を川と同列に扱っていることである。短歌の初めは、洪谿の崎に寄せる波に比喩して「しくしくに古思ほゆ」である。この「古」とは、人麻呂の吉野賛歌（三六から三九）が川と山も天皇に奉仕するというが、そんなよき時代を思っている「草枕 旅宿りせず 古思ひて」（四五）の軽皇子に期待する人麻呂と重なる思想である。異なるのは、家持は川と海を必ずしも弁別していないことである。

ちなみにこのことで興味深いのは山上憶良の作品である。

彦星は 織女と 天地の 分れし時ゆ いなむしろ 川に向き立ち 思ふそら 安けなくに 嘆くそら 安けなくに 青波に 望みは絶えぬ 白雲に 涙は尽きぬかくのみや 息づき居らむ かくのみや 恋ひつつあらむ さ丹塗りの 小舟もがも 玉巻きの ま懼もがも（二）に云ふ「小棹もがも」 朝なぎに いかき渡り 夕潮に（一）に云ふ「夕にも」 い漕ぎ渡り（略）（八・一五二〇）

「青波に 望みは絶えぬ」「朝なぎに いかき渡り 夕潮に（一）に云ふ「夕にも」 い漕ぎ渡り」とあるのは、天の川というよりも天の海である。七夕で登場した天の川を海として描く憶良がそこにいる。家持は、二上山の帯としての川を海として描いているのである。ここには、伝統的な山と川を共時的に描くことから、山と海を描く手法を取り入れた原点があるのであろう。憶良に学ぶ手法であった。次にやはり巻十七にある立山賦を引用する。

（略） 新川の その立山に 常夏に 雪降り敷きて 帯ばせる 片貝川の 清き瀬に 朝夕ごとに 立つ霧の

思ひ過ぎめや あり通ひ いや年のはに よそのみも 振り放け見つつ 万代の 語らひぐさと いまだ見ぬ
 人にも告げむ 音のみも 名のみも聞きて ともしぶるがね (四〇〇〇)
 立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし (四〇〇一)
 片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む (四〇〇二)

北アルプス立山を最初に紹介したのが家持であった。その意味では有名であるが、立山自身の表現は「新川のその立山に 常夏に 雪降り敷きて」と四句だけであり、山部赤人の富士山の歌で試みられた雪の高山の伝統を踏まえていても山の形容に不満が残る。片貝川も長歌と短歌(四〇〇二)に登場するが、北に偏りすぎていて立山(雄山を中核とする)にふさわしいかどうか、むしろここで言う立山は立山連峰ではないかという疑義の残る名称である。歌の本質は、立山という名称を都に住む人に伝えることであり、「万代の 語らひぐさと いまだ見ぬ 人にも告げむ 音のみも 名のみも聞きて ともしぶるがね」ということであつたのであろう。

しかし、どこまで北アルプスの三千メートル級の山々が布勢の海水、或いは洪谿の海岸から海を隔てて見えることの特異性が伝わっているのであろうか。その意味では、山の歌としては賦などの言葉に注目があつまるが、独自の個性まで指摘する内容が難しい。

平成十九年高岡市万葉歴史館では、「越中万葉の山——二上山と立山——」と題する特別展示を行っている。そこでは、立山が狭義立山(雄山を中心)と立山連峰と二つあったと紹介していることが注意される。越中時代では、川の歌が十九首、山の歌が三十一首、山と川をうたう歌が十四首ということからも、川にも注目していた守家持がいたのである。

四 越中の川

三千メートルのアルプスに降り注ぐ雨が流域二、三十キロで富山湾に注ぐ川が片貝川であり、延槻(の)河である。それよりはるかに流域が長大であるにせよ、現在富山市を流れる神通川、常願寺川なども急流と洪水との戦いがあつたはずで、富山平野の新田開発は国守の頭痛であつたであろう。平地は砺波平野が越中で中核であり、現在の富山市付近はなかなか古代の土木技術では治水がむずかしい。川は六首にうたわれた射水川が家持の身近な存在である。新田の開発にこころを痛めていた家持は、その新田に欠かせない水のことであつてか、越中では川の歌も多い。登場回数からいえば、射水川が六例であり、片貝川、辟田川と叔羅川(越前日野川)がそれぞれ二例である。その他は一例である。固有名詞でうたわれた川は、越中と能登という家持の国守の支配地にある川が基本である。射水川は、古くは国守館近くを流れる大河であり、一般的に川としかいわないこともある。

山口博氏は、「第七回万葉みやびをうたう・小矢部川」という講演(注)をしている。ここでは、万葉集でうたわれた富山県の八河川にふれ、とりわけ小矢部川(万葉射水川)に触れているが、雪解け水による増水の恐怖が歌から読み取れるとして、さらに新田開発に地方豪族を含めた複雑な対立があつたりもした、としている。射水川(小矢部川)、雄神川(庄川)、宇奈比川(宇波川)、売比川(神通川)、鵜坂川(神通川)、延槻川(早月川)、可多加比川(片貝川)として現代の川の名前も紹介しているが、この当時は能登も含めて越中であるので、この論では饒石川を含める。

赴任して三年目の春であつた。三十一歳の国守が初めて出挙に出かけたときには、九首の羈旅歌中で越中の四首全と能登での一首に川の名前が歌われている。この歌群については、既に述べたことがある。(注)

越中では、家持の山と川の歌では、むしろ川の歌に本質的な風土を踏まえた内容がある。そこで家持の代表的な川

と関わる歌としては、越中巡行に詠まれた歌を取り上げたい。ここでは、「雄神川」「鵜坂川」「婦負川」「延槻川」「饒石川」がうたわれていて、合計九首の短歌がうたわれている。その中では五首が具体的な名称を伴って川がうたわれた。巡行の順番に歌が配列されているので、川がうたわれない歌も例に取り上げる。出発は、国府近くから始まって北上して、国府近くに戻り、氷見から羽咋に峠を越えて能登に向かっている。雄神川としてうたわれた庄川には、現在高岡市に葦付公園がある。全ては巻十七に収められた歌である。

礪波郡の雄神川の辺にして作る歌一首

雄神川紅にほふ娘子らし葦付「水松の類」取ると瀬に立たすらし(四〇二二)

婦負郡にして坂の川の辺を渡る時に作る一首

鵜坂川渡る瀬多みこの我が馬の足掻きの水に衣濡れにけり(四〇二二)

鵜を潜くる人を見て作る歌一首

婦負川の早き瀬ごととに篝さし八十伴の緒は鵜川立ちけり(四〇二三)

新川郡にして延槻河を渡る時に作る歌一首

立山の雪し来らしも延槻の川の渡り瀬あぶみ漬かすも(四〇二四)

気太神宮に赴き参り、海辺を行く時に作る歌一首

之乎路から直越え来れば羽咋の海朝なぎしたり舟楫もがも(四〇二五)

能登郡にして香島の津より船を発し、熊来村をさして往く時に作る歌二首

とぶさ立て舟木伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びそ(四〇二六)

香島より熊来をさして漕ぐ舟の楫取る間なく都し思ほゆ (四〇二七)

鳳至郡にして饒石川を渡る時に作る歌一首

妹に逢はず久くなりぬ饒石川清き瀬ごとに水占延へてな (四〇二八)

珠洲郡より船を發し、太沼群に還る時に、長浜の湾に泊まり、月の光を仰ぎ見て作る歌一首

珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり (四〇二九)

右の件の歌詞は、春の出挙に依りて、諸郡を巡行し、当時当所にして、属目し作る。大伴宿祢家持

まずはじまりが「雄神川」(庄川)であるが、昔雄神村が東砺波郡にあつたのであるから、そこを流れる川をいうのであろう。もちろん明治以前には小矢部川も雄神川に合流して富山湾に注いでいたというから、国衛近くでは別々の川ではない。「鵜坂川」「婦負川」は、ともに現在神通川である。順番からは「婦負川」を常願寺川とも考えられるが、上流にイオウの鉱床があるので鵜飼いに適当ではないとして、神通川といわれる。「延槻河」は、現代名が早月川であり、「饒石川」も現在仁岸川と呼ばれていて名称の変化がないか、無いに等しい。

以上の川は、初めての出挙という国守が自分の支配する国を巡行しているためか、あまたある川の中でもとりわけ印象的な川を取り上げているのであろう。一般的であるが、越中は北アルプスと立山連峰を源とする川に特徴がある。山と川に風土の特徴があるのであるが、現在立山と呼称されるアルプスの一部を源とする川は、常願寺川と黒部川が著名である。しかし、このどちらの川もうたわれていない。理由は、常願寺川は、鵜飼いに適さなかったことがあるのであろうし、黒部川はそこまで春の出挙で至っていないのかもしれない。

ちなみに出挙とは、春に種籾を貸し出し、秋の収穫時に利息を付けて返納させる制度であり、国守が視察のために

巡行したのである。^(註1) 家持は、天平十八年秋に赴任して、翌十九年は病氣であつたので、三年目にして初めての出挙の爲の視察であつた。距離は三百キロほど、期間は三週間ほどであろう。時期は卷十七の巻末であるので、伊藤博氏の家持歌日記と呼称された卷十七の構成からは二月であらう。^(註2)

巡行としては見慣れた川であつても新鮮なのであらう。雄神川は国衙から近いこともあるし、今次は「葦付（みるの類）」という食料に興味を持つている。日常の川であつても、川の特産品に触れたところが特異な存在である。次の、鶴坂川（神通川）も国府から比較的近いところであるので、初めての渡河とも思われぬ。アルプスは真つ白であつても、平野を流れる川は確実に雪解け水で増水していたのであらう。

むしろこれまで渡河の経験があつて、馬の足掻きで衣を濡らしたことにむしろ興味を示したといふべきである。この春の出挙が旧暦の二月か、三月かで議論の分かれるところであるが、意外な川の水量に驚きを持つていたことになつて、歌からも雪解けを表面的に感じさせない立山の姿を連想することから、二月説に賛同する。

家持の川の歌として殊に特徴的な内容を示すのは、延槻河である。この上流を立山としてゐるが、正しくは立山連峰の剣岳を源とする。しかし、川の源流に雪を頂く高山を川の増水でうたうのは、万葉集でもこの歌だけである。野田浩子氏は、「一首全体の理解から『来らしも』とした」と述べるが、この理解の根本は、立山に中心があるのでなく、川に雪消の水を感じているところにある、^(註3) としている。もちろん下流の増水から、上流の風雨を思い至つた歌は、すでにある。

ふさ手折り多武の山霧繁みかも細川の瀬に波騒きける（九・一七〇四）

細川とは現在冬野川と呼ばれ、祝戸で飛鳥川にそそぐ多武峰を源とする小川である。飛鳥川まで二、三キロの流れであるが、標高五六メートルから一気に流れ落ちる谷川であるから、上流で雨が降ればたちまち細川の瀬も川音をあげしきたてる波が出来るのであろう。下流の瀬波から上流の山を思いやつて詠んでいる人麻呂歌集の歌である。そもそも「立山の」の家持歌は、類型のない雪消の増水を自らの鐘に載せた足で感じている一首である。

ただし、第二句の「雪し来(消)らしも」が雪解けを認めたのか、雪解け水がやつて来たのか、で解釈が分かれる。雪解け水で立山の雪解けを感じたのであれば、人麻呂歌集歌にいつそう類似するといえる。

結 び

少納言として都に戻った三十四歳から四十二歳までは、天平勝宝三年十月二十三日にうたわれた歌が都での創作開始である。山川のうたは、十一首であり、その内訳は「山川」と詠まれたのは三首で、山の歌が七首、川の歌が一首である。山といっても庭の築山を「島山」と呼び、あるいは竜田山をうたい、天孫降臨にちなむ族を喩す歌(四四六五)で「ひさかたの 天の門開き 高千穂の 岳に天降りし」という。その他「山川のさやけき見つ」(二十・四四六八)などいいながら孤愁をうたうが、習作時代と異なり都の風土との関わりが希薄である。

そこで家持の作品を編年体に並べて、習作、越中に分けて山と川の歌を見ていくとき、それぞれに特徴がある。初期である習作時代には挽歌にうたわれた山の歌が個性的であるが、その一方で相聞にも紹介したい山の歌があった。これらの歌には、山城で埋葬された安積皇子の和束山と奈良と山城を隔てる一重山である平城山がある。

あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬるとき我が大君かも (三・四七七)

一重山隔れるものを月夜良み門に出で立ち妹か待つらむ (四・七六五)

越中では二上山と立山が山の代表である。川は鵜飼いに興味を示して、「鵜川立つ」という表現が多いのも特徴である。また、個性的な作品は、越中時代に山川の代表作が誕生している。山の歌では、やはり越中時代の立山賦と二上山賦ということになる。但し、この代表的な山の歌は、都の人に越中を紹介するとともに、山誉めの伝統である国土繁栄を祈るものである。

私は有名な山の歌よりも、山川の代表的な歌は、家持三十一歳になった天平二十年の立山と延槻の川を同時にうたう一首、次に川の歌として水占いうたう一首である、と考えている。

立山の雪し来らしも延槻の川の渡り瀬あぶみ漬かすも (四〇二四)

妹に逢はず久しくなりぬ饒石川清き瀬ごとに水占延へてな (四〇二八)

「立山の」の歌を代表として取り上げることには、異存がないであろう。しかし、「妹に逢はず」の歌は疑義を抱かれるかも知れない。

ちなみに伊藤博氏は饒石川（仁岸川）のある故地に昭和五十九年に一度訪れたとして、「読み直してみるべき歌なのではなからうか」とする。^(注4)むしろ川の名前の豊穰と妹に久しく会っていない嘆き、それを第五句「水占延へてな」という万葉唯一の歌語を用いているのであるから、悲しさも水の流れとしてつもの。いったい水占いとは、いかなる

内容のものなのであろうか、具体的な占い方法は解っていない。しかし、川という流転に任せる占いに、神頼みということよりもっと重い独りを感じる。それを、孤愁というのであろう。現在の剣地にある仁岸川を眺めれば、鳴き砂海岸に近接する観光地があつても、伊藤氏の反省も納得できる。

大和で育ち、さらに平城京を中心に、せいぜい聖武天皇に従い、大和周辺の副都で過ごしたのであり、名門大伴氏出身であつて、高位高官ともなるべき身分であり、幼少に大宰府で短期間生活したであつたにせよ、家持が鄙であつた越中・能登をどう考えていたかは、山川に限定しても興味深い。彼ほど鄙の風土に関心を持つて作歌した貴族歌人が古代に、或いは中世にいたのであろうか、と。

個性的ということからは、山川と川の歌には万葉歌人の何人も至らなかつた風土を踏まえた心情表現に昇華している越中歌があつたことを述べた。

注

注1 『古事記注釈(一)』の六九頁に「地上の地すなわち earth であり、したがつてこの地は海をもふくみ」とある。とすれば、当然地に対応する天にある高天の原にも海も陸もあつたことになる。高天の原、天の川、天の岩戸などがその例証になる。

注2 『万葉歌に詠まれた山——その景観認識をめぐる覚書——』『万葉古代文学研究年報四号』

注3 『統明日香村史(中巻)』(第三章第一節十八、二十)で源流としての山の存在に触れた。

注4 『「さよげ」「さよら」再考その1。万葉集における「さよし」の意義を中心にして』(高知女子大保育短大紀要)十六号)

注5 沢瀧久孝氏は、四七七番歌を、『万葉集注釈(巻三)』六四九頁に「年僅か十七歳で薨去された皇子を悼む言葉としてふさわしい譬喩である」とする。

注6 伊藤博氏は、七六五番歌を、『万葉集注二』六七五頁で「山は妻どいの頑強な隔て」と述べる。また、月明かりは妻どいのための最良の条件とされた。その対立二つの取り合わせが断絶感を深めた、とする。

注7 万葉五賦、或いは家持三賦については、研究史としても長い歴史をもっている。とりわけ最近参考とすべき文献がある。

『セミナー万葉の歌人と作品(八) 大伴家持(二)』(和泉書院)であるが、二上山賦については針原孝之氏が、布勢の水海賦については島田修三氏が、また立山賦については原田貞義氏が研究史を踏まえて精緻に論じている。但し、最も穏当な説と思われる小野寛著『孤愁の人大伴家持』(新典社)の一四六頁から引用した。

注8 高岡市万葉歴史館ホームページ <http://www.manreki.com/> 参照。

注9 富山県ホームページ <http://www.tkc.pref.toyama.jp> 参照。

注10 「家持天平二十年出拳の諸郡巡行歌の特質」(「広島女学院大学日本文学」第十二号)で触れた。歌群としては、構造を持つと言ふよりも、日記風の内容であって、「当時、当所に属目して作れり」ということが九首の歌の基本である。

注11 出拳については舟尾好正氏(『日本の古代国家と農民』春夏二季出拳の意義)と宮原武夫氏(『出拳の実態に関する一考察—備中国大税負死亡人帳を中心にして』(『史林』五十五卷五号)などを参照している。実際の越中・能登を巡行するこの出拳期間と距離については、山口博氏が『万葉の歌(十五) 北陸』(保育者)の一九三頁に「全行程少なくみつもつても三百キロ、一日約二十キロ平均とし十五日間の長旅」と記す。私は、行程三百キロは認めたいが、二週間は三週間に改めたい。根拠は、能登が二月の日本海の厳しい船旅であったということ、陸路の倍の日数を費やしたからと考える。

注12 二月説の伊藤博氏は、万葉集の家持日記巻十七、十八、十九がそれぞれの巻が二月で終えて、巻頭が三月から始まるという基本があったとしている。詳しくは、『万葉集全注巻十八』(有斐閣)の巻十八概略二頁から三頁で紹介しているが、当然この論理からは巻十七の巻末に近い出拳が二月に行われたことになる。

注13 「立山の雪し来らしも」(『万葉集の叙景と自然』所収)三六〇頁

注14 伊藤博氏『万葉集釈注(九)』三四六頁

参考資料 山と川の句

巻	歌番号	山と川の句	巻	歌番号	山と川の句	巻	歌番号	山と川の句
8	1554	三笠の山の / 秋黄葉	17	3987	玉くしげ / 二上山に	19	4151	あしひきの / 峰の上の桜
8	1568	春日の山は / 色付きにけり	17	3991	宇奈比川 / 清き瀬ごとに 玉くしげ / 二上山に	19	4152	奥山の / 八つ峰の椿
8	1447	ほととぎす / 佐保の山辺に	17	4000	山はしも / しじにあれども / 川 はしも / さはに行けども 新川の / その立山に 帯ばせる / 片貝川の	19	4154	あしひきの / 山坂越えて
8	1494	夏山の / 木末の繁に	17	4001	立山に / 降り置ける雪を	19	4156	あしひきの / 山下とよみ 流る辞田の / 川の瀬に
4	715	佐保の川門の / 清き瀬を	17	4002	片貝の / 川の瀬清く	19	4157	辞田川 / 絶ゆることなく
4	739	後瀬山 / 後も違はむと	17	4006	かき数ふ / 二上山に 射水川 / 清き河内に 白雲の / たなびく山を	19	4160	あしひきの / 山の木末も 行く水の / 止まらぬごとく
3	466	あしひきの / 山路をさして	17	4011	白雲の / たなびく山を 行く川の / 清き瀬ごとに 二上の / 山飛び越えて	19	4163	川の瀬に / 露立ち流れ
3	471	山隠しつれ / 心利もなし	17	4015	須加の山 / すかなくのみや	19	4164	あしひきの / 八つ峰踏み越え
3	474	奥つ城と思へば / 愛しき佐保山	17	4021	雄神川 / 紅にほふ	19	4166	あしひきの / 八つ峰飛び越え
8	1629	山鳥こそば / 峰向かひに 高門の / 山にも野にも	17	4022	邊坂川 / 渡る瀬多み	19	4169	山のたをりに / 立つ雲を
6	1035	田路川の / 瀬を清みか	17	4023	婦負川の / 早き瀬ごとに	19	4177	思ひ延べ / 見和しがし山に 八つ峰には / 露たなび / 瀧波 山 / 飛び越え行きて
17	3911	あしひきの / 山辺に居れば	17	4024	立山の / 雲し消らしも 透視の / 川の波り瀬	19	4178	ほととぎす / 丹生の山辺に
8	1602	つま恋に / 鹿鳴く山辺に	17	4026	能登の島山 今日見れば	19	4180	あしひきの / 山呼びとよめ
8	1603	山呼びとよめ / さ雄鹿鳴くも	17	4028	鏡石川 / 清き瀬ごとに	19	4185	繁山の / 谷辺に生ふる
6	1037	山川の / さやけき見れば	18	4076	あしひきの / 山はなくもが	19	4189	叔羅川 / なづきひ浜り
16	3854	鰍を取ると / 川に流るな	18	4089	山をしも / さはに多みと	19	4190	叔羅川 / 瀬を尋ねつつ
4	765	一重山 / 隔れるものを	18	4094	山川を / 広み厚みと 陸奥の / 小田なる山に	19	4191	瀬川立ち / 取らさむ巻の
8	1464	たなびく山の / 隔れば	18	4097	陸奥山に / 金花咲く	19	4192	まそ鏡 / 二上山に
8	1632	あしひきの / 山辺に居りて	18	4098	この川の / 絶ゆることなく / この 山の / いや継ぎ継ぎに	19	4195	ほととぎす / いつへの山を
8	1635	佐保川の / 水を響き上げて	18	4100	吉野川 / 流る水沫の	19	4214	あしひきの / 山川隔り 行く水の / 留めかねつつ
4	769	ただひとり / 山辺に居れば	18	4106	射水川 / 流る水沫の	19	4225	あしひきの / 山の黄葉に 散らぬ山路を / 君が越えまく
4	779	山近し / 明日の日取りて	18	4111	あしひきの / 山の木末は	19	4239	二上の / 峰の上の繁に
3	475	山辺には / 花咲きををり / 川 瀬には / 年魚子さ走り 和東山 / 御興立たして	18	4116	岩根踏み / 山越え野行き 射水川 / 雪消溢りて	19	4266	あしひきの / 八つ峰の上の 島山に / 赤る橋
3	476	おほにそ見ける / 和東山	18	4122	あしひきの / 山のたをりに	19	4281	白雲の / 降り敷く山を
3	477	あしひきの / 山さへ光り	18	4125	安の川 / 中に隔てて	19	4288	川渚にも / 雪は隠れれし
3	478	活道山 / 木立の繁に	18	4126	天の川 / 橋渡せらば	20	4305	木の踏の / 繁き峰の上を
17	3953	秋風寒み / その川の上に	18	4127	安の川 / い向かひ立ちて	20	4309	秋風に / なびく川辺の
17	3957	あをによし / 奈良山過ぎて / 泉川 / 清き川原に 山川の / 隔りてあれば あしひきの / 山の木末に	18	4136	あしひきの / 山の木末の	20	4360	山見れば / 見のともしく / 川 見れば / 見のきやくく
17	3962	あしひきの / 山坂越えて	19	4145	秋風に / もみたま山を	20	4395	龍田山 / 見つ越え来し
17	3964	山川の / そきへを過み	19	4146	川瀬尋め / 心もしに	20	4397	見渡せば / 向つ峰の上の
17	3969	あしひきの / 山さへなりて	19	4147	夜降ちて / 鳴く川千鳥	20	4398	いや高に / 山を越え過ぎ
17	3978	あしひきの / 山越え野行き 卯の花の / にほへる山を	19	4150	射水川 / 朝漕ぎしつつ	20	4465	高千穂の / 岳に天路りし 山川を / 岩根さくみて
17	3981	あしひきの / 山さへなりて				20	4468	山川の / さやけき見つつ
17	3983	あしひきの / 山も近きを				20	4481	あしひきの / 八つ峰の椿
17	3985	射水川 / い行き遅れる / 玉く しげ / 二上山は						